

小学部における音楽科教育の実践

～音楽の基礎的な力をつけるために～

山本 カヨ子

小学校学習指導要領において音楽科の目標は「表現（歌唱、器楽、身体表現）や鑑賞の活動を通して、音楽のよさや楽しさを感じるとともに、音楽活動の基礎的な能力を培い、音楽と生活との関わりに関心を持ち、音楽に親しむ態度を育むことである」と示されている。特別支援学校（聴覚障害）での音楽科の学習においても、この目標を念頭に置きながら指導していくことが重要である。児童の発達段階を踏まえ、授業の中で様々な配慮や工夫をし、学習を積み重ねていくことで、その目標を達成できると考えている。そのための具体的な方法や指導内容、さらにその連続性について述べる。

キー・ワード：音楽科 拍感 リズム 読譜力 音声での歌唱 生きる力 小学部

1 はじめに

近年、補聴器の性能は向上し、人工内耳を装着している児童も増加している。重度の聴覚障害があっても、以前に比べ、聴覚を活用できる子どもが増えていることを実感している。

しかし、小学部に入学してくる子どもたちの言葉の力を見ると、教科学習が十分行えるだけの言葉を身につけている児童は少ない。そのため、音楽の授業を進める上でも、教科の指導のみでなく、日常生活上の言葉なども、場に応じて指導している。

また、音楽の3要素である旋律、和音、リズムに目を向けると、個人差はあるものの、旋律や和音を聴き分け楽しむことは難しいが、リズムに関しては聴力が厳しい児童でも学習を積むことで音符や休符の長さを理解し、聴き分けたり表現したりすることができるようになる。リズムを支える柱となる拍の感覚を育てることが、音楽を表現したり受けとめたりする上での基礎的な力となり、自らの学びへと繋がっていく。今回は、以上の観点のもとに行った実践について報告する。

2 研究の目的

低学年児童の発達段階を通して、音楽の目標を達成するための配慮や方法について実践し、その有効性を考察する。

3 音楽を学習する上での実態

聴覚障害児は聴児と比べ、日常生活において自然な形で音楽と触れる機会が少なく、また、聴覚を通じた情報の獲得が困難なため、低学年段階の児童では既知の歌はほとんどない。

学習指導要領では、「拍の流れを感じとりながら音楽に合わせてうたったり、演奏したりする。」と書かれている。

音楽は、拍が一定の時間的間隔をもって刻まれている。聴児の場合、聞こえてくる音楽から無意識に拍を感じとっている。乳幼児であっても、リズムカルな曲や聞きなれた音楽が聞こえてくると、拍に合わせて身体をゆすったりする姿が見られる。ところが、聴覚障害児の場合、音としては聞こえていても、音楽には拍が一定の時間的間隔をもって刻まれていることを聞こえた音から捉えることは難しい。そのため、意図的に拍の存在を教え、拍の意識を育てることが必要である。

4 実践

(1) 拍感を育てるための導入

① 音を聞いて挨拶 一音の有無を感じ取る練習として 一

音に耳を傾けようとする態度作りのために、授業の始めの挨拶は電子オルガンの音で行う。挨拶は児

童にとっては、これから授業が始まるという気持ちの切り替えであり、教師にとっては児童の聴こえの状態や体調の把握も兼ねている。

I V I の和音に合わせて礼をするルールが理解でき、音に合わせて動作ができるようになったら、音の長さを変化させたり、音の高さを1オクターブ上げたり下げたりして提示することで、しっかりと音を聴こうとする姿勢を育む。

その後それぞれの和音で提示する際に、小さな音からクレッシェンドして音量を上げていき、子ども自身が聞こえたところで、その和音に応じた動作をする。結果として、各自の動きは揃わないが、全員が聞こえた音量のところで、次の和音に移るようにする。このようにすることで、音楽科の教員として個々の児童の聴こえの状態を常に把握すると共に児童の音に意識を集中する姿勢をより強めていく。

② 拍への導入

拍の学びにおいては具体的には次のような方法を用いている。

- I. 「音楽」を「お・ん・が・く」と4文字で言えることを確認する。
- II. 「音楽」を実際の日本語発音の拍に合わせて「おん」と「がく」にかき分け、それぞれを○で囲む。
- III. 1拍だけ取り出して「おん」だけ手を叩きながら言わせる。できるようになったら同様に「がく」だけ手を叩きながら言わせる。1拍を手を叩きながら言っても、2拍続けてオン・ガクになると言えなくなってしまうというのはよくあることである。うまくできない児童には、ゆっくりのテンポにして手本を示したり、肩を叩いて拍を感じ取らせたりする。
- IV. だんだんと拍の数を増やしていく。具体的には「やま・もと・せん・せい・おん・がく」という6拍の課題を提示して身体全体で拍を感じ、初めから終わりまで同じテンポで手を叩きながらいう練習をする。その際にも、それぞれの拍に該当する文字を○で囲み、○で囲まれている文字が一つの拍(まとまり)であることが児童の中に定着するようにしている。

V. 一人でできるようになったら、友だちと合わせてできるようにさせる。2人から3人、4人と増やしていく。何回か練習を積むことでできるようになる児童もいれば、5回、6回と授業の回数を重ねてできるようになる児童もいる。手を叩くだけの練習では飽きてしまうので、楽しく練習を重ねられるように簡単な身振りをつける。できるまで何度も繰り返しの練習が必要なため、最後にイエ〜ィと自分の好きなポーズをつける。そのような動きを伴わせることで児童はポーズを考える楽しさから、単調になりがちな繰り返し練習を自発的に行うようになる。(Fig.1)

これらのことが正確にできるようになれば、四分音符と照らし合わせて叩くことができるようになる。このことが、音楽科の学習の基礎となる活動である。

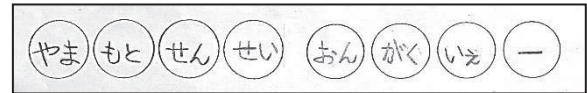


Fig. 1 拍との出会いを学ぶ教材

(2) 拍への意識を育てる

これまで述べてきたことに配慮しながら、実際の曲での指導について述べる。

聴覚障害児の場合、言葉の発達の遅れとの関係もあり、小学校入学当初は、歌と言葉の違いですら認識できない児童もいる。そのため、歌唱の導入段階ではすべての児童が取り組みやすい楽曲を選んでいる。

① 拍のかたまりを理解させる。—教材「まつぼっくり」(Fig. 2)—

(a) 拍のかたまり

先述した導入学習を継続しつつ、最初に取り組むのがこの楽曲である。

この楽曲は、「あったとき」という同じ歌詞が3回繰り返されている。そのため、言葉の発達が遅れ気味の児童であっても、この部分が拍に合わせて歌詞を言えるようになれば、楽曲全体の8分の3の歌唱に参加することができるため、児童の達成感を育みやすい楽曲になっている。

歌詞を提示する際は、歌詞を○で囲み視覚的に拍

を確認できるようにする。

このように取り組みやすい楽曲であっても、聴覚障害を持った子どもは全曲を通して歌うことはかなり難しい。そのため、「あつたとき」の部分練習をする。その後教師と分担唱を行う。具体的には児童は「あつたとき」の部分のみを歌い、それ以外の部分は教師が歌う。その際、教師は身体を大きく動かして児童が拍を感じとりやすいようにする。

ある程度完成度が高まったら、分担する部分を交代して、手で拍の○を叩きながら歌う練習を行い、異なる部分も歌えるようにし、その後全曲通して歌えるようにする。歌の伴奏は拍を感じ取りやすいように、左手は拍に合わせ和音だけで演奏している。

このような方法で小さなステップで学習し、小さな成功体験を積み重ねていくことが児童の主体的な姿勢へとつながっていく。

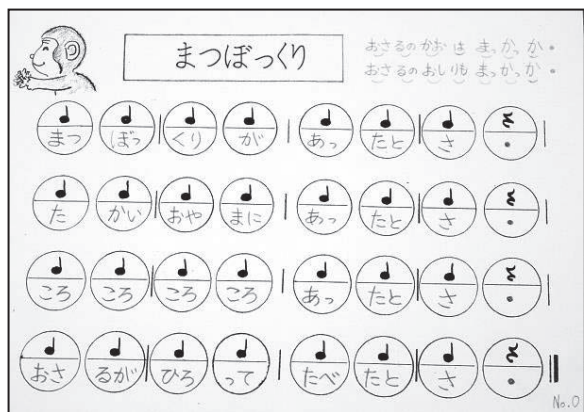


Fig. 2 教材「まつぼっくり」

(b)休符の指導

休符も拍の一つなので、この曲に含まれる四分休符についてもしっかり扱っている。

聴覚障害児を担当する音楽教諭の間では、休符をぬかしてしまいがちな事例を耳にすることが多い。音や歌詞がある部分は表現できるが、休符のように音も歌詞もない、空白の時間を感じ取ることは意外と難しいようである。ないものがある、空白の時間を意識づけるには、空白の時間を「・」で表し視覚化して表記したり、休符の記号と結びつけたりして理解させる。

また、教師のみが歌い、児童は、あえて休符のみ手を叩かせる。この方法は、音がない空白の拍を叩

かせることで、休符を意識化することができ、児童にとって解りやすく、また、効果がある練習方法である。しっかり見て聴いていなければ、正しい拍の位置で休符を叩くことができないため、楽譜を目で追いながら歌の流れを感じとったり、聴いたりする練習にもなる。小さな成功体験を積み重ねていくことが児童の主体的な姿勢へとつながっていく。

② 拍の流れ ー教材「こいのぼり」(2年生)
(Fig. 3)ー

拍のかたまりから拍の流れへとつなげていく際、3拍子は強 弱 弱の構成なので拍の流れを理解させやすい。しかし、季節感も大切にしたいため、2年次の学習では次のようなことにとどめている。

- I. 1拍目の拍の○を大きくしたり、色を変えたりして視覚的にわかりやすく提示する。
 - II. 3拍子に合わせて手をたたく練習をする。
- そして、この楽曲は3年次の同時期に再び扱い次の2点についての学習を行う。
- III. ボールを使い拍感、3拍子感を体全体で感じ取らせる。
 - IV. 教師の3拍子の指揮に合わせて歌う。

上記のIIIでは1拍目の大切さを意識させるために、1拍目に両手でボールをつき、2, 3拍目はボールを両手で持ったまま身体の前で上下させる。できるようになったら、2, 3拍目はボールを身体の前で左右に揺らすことで、曲の流れやフレーズ感を感じ取らせる。ボールを使う練習は児童達にとってとても楽しい活動であり、低学年でも拍が合っているということを視覚的に実感しやすい活動である。

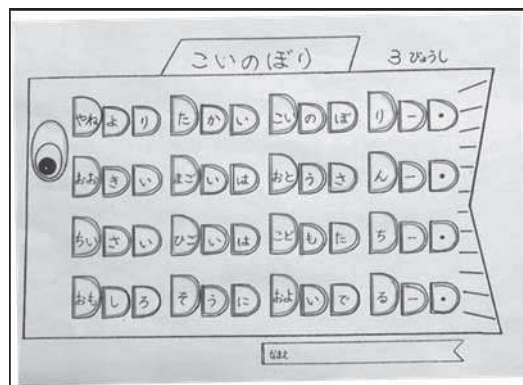


Fig. 3 教材「こいのぼり」

